

【職業教育コラム（宮田雅之②）】

新渡戸稲造と実学

「僕は詩を作るより田を作れ主義である。」

これは新渡戸稲造が著書「修養」の中で述べた一文である。現実社会に役立つ知識・行動を重んじる新渡戸が「実学」の大切さを語る象徴的な言葉といえよう。

新渡戸は、決して詩や文学的趣味を否定しているのではない。それが自己満足や遊戯に終わるならば、社会や生活の糧になる「田を作る」こと、すなわち現実的で有用な営みを優先すべきだと主張している。

新渡戸が活躍した当時の日本は、「殖産興業」すなわち「生産を増やし産業を盛んにすること」を国家の目標として掲げていた。新渡戸は、札幌農学校（現・北海道大学）で農学を学んだこともあり、農業を産業の核として捉え、学問を産業や国民生活の向上に直結させる「実学」が大切であると説いていた。

一方、新渡戸は「実学」を単なる「知識・技術の習得」という狭義に捉えていない。勤労を通じた人格の陶冶（とうや）、倫理的な涵養（かんよう）も含めて考えていた点に、新渡戸の特徴を見出すことができる。知識や技術を持っても「人間性」が欠けていては本当の意味での学問にならない、と新渡戸は繰り返し述べている。

新渡戸が初代校長を務めた学校に新渡戸文化学園（東京都中野区）がある。こども園、小学校、中学校、高等学校、そして短期大学を擁する総合学園である。同学園には「心外無別法（しんげむべっぼう）」と書かれた直筆の書が残されている。もともと仏教（禅）の語に由来し、「心の外に別の真理や方法はない」という意味を持つ。

心すなわち人格の外に学問・教育の真の方法はないと説く新渡戸の実学思想は、人格教育を基盤とした実学として理解できる。経済合理性が優先されがちな現代社会において、新渡戸の理念は静かにかつ重く「警鐘」を響かせているように感じてならない。

